

みどりの かえると きいろの かえるが、はた
けの まんなかで ばったり であいました。

「やあ、きみは きいろだね。きたない いろ
だ。」と、みどりの かえるが いいました。

「きみは みどりだね。きみは じぶんを うつく
しいと おもっているのかね。」と、きいろの か
えるが いいました。

こんな ふうに はなしあっていると、よい こ
とは おこりません。二ひきの かえるは、とうと
う けんかを はじめました。

みどりの かえるは、きいろの かえるの うえ
に とびかかって いきました。この かえるは、
とびかかるのが とくいでした。

きいろの かえるは、うしろあしで すなを け
とばしました。そのため、あいては なんども め
から すなを はらわなければ なりませんでし
た。

すると そのとき、さむい かぜが ふいてきま
した。

二ひきの かえるは、もうすぐ ふゆが やつてくることを おもいだしました。かえるたちは、つちの なかに もぐって、さむい ふゆを すごさなければ なりません。

「はるに なったら、この けんかの しょうぶ*をつける。」と 言って、①みどりの かえるは つちに もぐりました。

「いま いった ことを わすれるな。」と 言って、きいろの かえるも もぐりこみました。

さむい ふゆが やつてきました。かえるたちの もぐっている つちの うえに、びゅうびゅうと きたかぜが ふいたり、しもばしら**が たつたりしました。

そして、それから はるが めぐってきました。つちの なかに ねむっていた かえるたちは、せなかの うえの つちが あたたかく なってきたので、はるが きたと わかりました。

さいしよに、みどりの かえるが めを さましました。つちの うえに でてみました。まだ、ほかの かえるは でていません。

「おいおい、おきたまえ。もう はるだぞ。」と、つちの なかに むかって よびました。

すると、きいろの かえるが、「やれやれ、はるになったか。」と 言って、つちから でてきました。

ことば * しょうぶをつける：どちらが かつかを きめること。

** しもばしら：つちの なかの みずが こおって、ちいさな はしらの ように なったもの。

「きよねんの けんか、わすれたか。」と、みどりの かえるが いいました。

「まて まて。からだの つちを あらいおとして からに しようぜ。」と、きいろの かえるが いいました。

二ひきの かえるは、からだから どろや つちを おとすために、②いけの ほうに いきました。

いけには、あたらしく わきでて、ラムネの ように すがすがしい*** みずが、いっぱいにとまっていました。その なかへ、かえるたちは、とぶん とぶんと とびこみました。

からだを あらってから、みどりの かえるが めを ぱちくりさせて、

「③やあ、きみの きいろは うつくしい。」と いいました。

「そういえば、きみの みどりだって すばらしいよ。」と、きいろの かえるが いいました。

そこで 二ひきの かえるは、「もう けんかは よそう。」と いいあいました。

よく ねむった あとでは、にんげんでも かえるでも、きげんが よくなるものです。

ことば *** すがすがしい：さわやかで、きもちが よい ようす。

なまえ：

とく

もん1

―①で、かえるが つちに もぐったのは、なぜですか。一つ ^{ひと}えらびましょう。
ア けんかに まけたので、かくれるため。
イ つちの なかで、さむい ふゆを すごすため。
ウ つちを つけて、からだの いろを かえるため。

こたえ

もん2

―②で、二ひき^には からだか
ら なにを おとそうと
しましたか。こたえの ますに
あう ことばを、ぶんから
ぬきだしましょう。

や

もん3

みどりの かえるは、はじめ
は あいての いろを「きた
ない」と いいました。―
③では、どう おもっていま
すか。

あいての きいろは、

と おもっている。

問3

解答例：うつくしい

本文のどこを見るか

初めの「きたないいろだ」と、傍線③の「きみのきいろはうつくしい」。

考え方

完成形は「あいてのきいろは、うつくしいとおもっている」。同じ相手の色を、今度はよい色だと思っています。初めと終わりの言葉を比べます。

採点ポイント

本文の言葉をそのまま抜き出す指定はありません。「きれい」など、色の美しさを表す同じ意味の言い換えも正答です。「すてき」だけなら意味が広いため、色をどう思ったのか口頭でも確かめます。「なかよく なった」だけでは、色への見方が答えられていません。

問2

正解：どろ／つち

本文のどこを見るか

傍線②の直前の「からだから どろや つちを おとすために」。

考え方

池へ行った目的を確かめ、体から落とそうとしたものを、本文の言葉で答えます。完成形は「どろや つち」です。

採点ポイント

「どろ」「つち」を本文の順に書ければ正答です。逆に書いた場合は内容の理解を認め、本文の順に直すよう促します。「すな」は、けんかの場面との取り違いです。

問1

正解：イ

本文のどこを見るか

傍線①の前の「つちの なかに もぐって、さむい ふゆを すごさなければ なりません」。

考え方

寒い風をきっかけに、二ひきは冬が近いことを思い出しました。この物語で土にもぐった理由を答えます。

誤答の理由

ア：けんかの勝ち負けは、まだ決まっていません。
ウ：体の色を変えるためにもぐったとは書かれていません。

使い方・出典・教材制作

二ひきの蛙／小学1・2年生向け

印刷と使い方

全6ページ。本文は1～3ページ、問題は4ページ、解答・解説は5ページ、使い方・出典は6ページです。児童用のみなら1～4ページを印刷してください。A4横向き・片面・実際のサイズ（100％）で印刷します。本文を読む順に上へ並べ、問題をその下に置きます。

取り組み方

全1回です。結末まで読んでから、3問に取り組みます。初めと終わりを見比べられるよう、本文を手元に置きます。必要に応じて、大人が本文や設問を読み聞かせてください。

問題と採点

3択・抜き出し・短い記述が各1問です。記述に字数制限はなく、漢字を使う必要もありません。問2は本文の言葉で答えます。問3は意味を読み取る問題なので、「うつくしい」「きれい」など、色の美しさを表す言い換えも認めます。

読み方のポイント

二ひきの行動の理由や目的、相手の色を表す言葉の変化を読みます。春に目覚めた直後には、まだけんかを続けるつもりだったことも確かめます。泥を落としたために初めて美しくなった、と決めつけません。最後の一文は物語のユーモラスな語りとして味わいます。

本文の扱い

ご提供の青空文庫本文をもとに、平仮名を中心とした表記、分かち書き、一部語句・文の組み立てを整えました。「あとあし」を「うしろあし」、「泥土」を「どろや つち」などに改めています。出来事と会話を残し、ふりがな・注釈・傍線・設問を加えました。

作者・作品

作品：『二ひきの蛙』

作者：新美南吉

出典情報

底本：『ごんぎつね 新美南吉童話作品集1』

てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：『校定 新美南吉全集』大日本図書

入力：めいこ

校正：鈴木厚司、もりみつじゅんじ

2003年9月29日作成

出典の確認先

青空文庫

<https://www.aozora.gr.jp/>

本文と書誌・入力校正情報は、ご提供の青空文庫作成ファイルに基づきます。入力・校正・制作は、ボランティアの皆さんによるものです。

教材制作

家スタ！／学習舎シオン

新しい教材のご案内

新しいおはなし読解プリントは、【家スタ！】公式アカウントで先行配信しています